31/Mar/06
小田切さん

バージョン 3-9-2 での変更点（主にデバッグ機能の拡充）

■showmsg コマンド

showMsg コマンドと似た機能を持ちますが、以下の点が異なります。

（1）IP アドレス［オプション］を指定して表示させます。

（2）コマンド/レスポンス型、イベント通知型の両方に使用できます。

（3）オムロン ETN01 の場合にも 1 台ごとに表示させることができます。

（4）すべてが小文字で打ちやすいです。

一般的なフォーマットは、

```
iocsh> showmsg ip_addr, option
```

で、option（意味は後述）は省略可能です。option を省略した場合は、

例えば、

```
iocsh> showmsg 192.168.210.7
```

のように打ちます。/etc/hosts にホスト名が登録されていれば、

```
iocsh> showmsg hostname
```

とすることもできます。

option の値として、例えば 1 を指定する場合は、

```
iocsh> showmsg 192.168.210.7, 1
```

とします。option を略した場合は 0 を指定したのと同じ、つまり、

```
iocsh> showmsg 192.168.210.7, 0
```

と同じです。

オプションの意味

```
0: Command/response,   Binary
1: Command/response,   Ascii
2: Event notification, Binary
3: Event notification, Ascii
```

例えばオムロンの場合は 0（省略可）、N-DIM の場合はメッセージを

印字させたい通信に応じて 1 か 3 のいずれかを指定すること（必須）

になります。

引数なしで単に
iocsh> showmsg
と打つと、上の情報を含んだ使用法が印字されます（help 機能)。

■stopmsg コマンド
showMsg に対する stopMsg に相当するものですが、特定の I/O を対象にするのではなく、すべての印字をクリアする点が異なります。
メッセージを消すとき（ばらばらと印字されているとき）はコマンドが打ちにくいので、このような仕様が便利だと思います。

■showio コマンド
こちらはレコード名を指定して I/O を確認するために使うコマンドです。
iocsh> showio some:record:name
のように使います。
showMsg 系とは異なり、I/O メッセージの内容は表示されませんが、I/O に伴い、
Sending message for some:record:name ...
Got message for some:record:name ...
のようなメッセージが印字され、指定されたレコードに関わる I/O が実行されているか否かが分かります。 このコマンドも、コマンド/レスポンス型、イベント通知型のどちらにも使えます。

■stopio
Showio の結果として生じた全ての印字を停止します。

■peerShowAll と serverShowAll の改修
IP アドレスとポート番号、TCP/UDP の区別を印字するようにしました。

■ post_event 機能の改修

コマンド/レスポンス型の I/O の場合：

引数の与え方を変更しました。

以前：ドライバが割り当てる ID

現在：IP アドレス、ポート番号、プロトコルの組み合わせ

イベント通知型の I/O の場合：

廃止（I/O Interrupt で待つレコードから FLNK などで叩く方が自然）

●startEventServer の実行を促す警告の印字

イベント通知型のレコードをロードした場合は、startEventServer が実行されるまでの間、定期的に、「イベント・サーバがイネーブルされていません」という趣旨の警告メッセージを印字するようにしました。

（以上です。）